

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2016-53097
(P2016-53097A)

(43) 公開日 平成28年4月14日(2016.4.14)

(5) Int.Cl.		F I	テーマコード (参考)	
CO8F	4/00	(2006.01)	CO8F 4/00	4H006
CO8F	293/00	(2006.01)	CO8F 293/00	4J015
CO7C	69/73	(2006.01)	CO7C 69/73	4J026
CO7C	69/63	(2006.01)	CO7C 69/63	
CO7C	69/65	(2006.01)	CO7C 69/65	

審査請求 未請求 請求項の数 8 O L (全 19 頁)

(21) 出願番号 特願2014-178384 (P2014-178384)
(22) 出願日 平成26年9月2日(2014.9.2)

(71) 出願人 504132272
国立大学法人京都大学
京都府京都市左京区吉田本町36番地1
(71) 出願人 392000888
株式会社合同資源
東京都中央区京橋二丁目12番6号
(74) 代理人 100120868
弁理士 安彦 元
(72) 発明者 後藤 淳
京都府京都市左京区吉田本町36番地1
国立大学法人京都大学内
(72) 発明者 官本 充彦
千葉県長生郡長生村七井土1365 合同
資源産業株式会社内

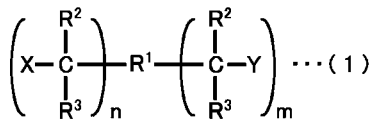
最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 リビングラジカル重合開始剤、重合体の製造方法及び重合体

(57) 【要約】 (修正有)

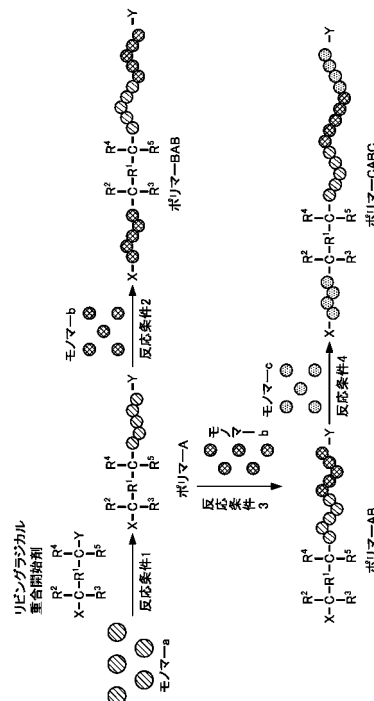
【課題】 反応性が異なる複数の開始基を有し、開始基毎に異なるリビングラジカル重合反応の進行が可能なりビングラジカル重合開始剤の提供。

【解決手段】 式(1)で表されるリビングラジカル重合開始剤。



(R¹はC1~12の脂肪族基、芳香族基、カルボニル基、スルホニル基又はこれらの基の2つ以上の組み合わせた連結基; R²~R⁵はH、C1~12の脂肪族基、芳香族基、カルボニル基、カルボキシル基又はスルホニル基; X、Yはハロゲン原子; m、nは1以上の整数; 但し、XとYはモノマーに対し、互いに反応性が異なる状態)

【選択図】 図1

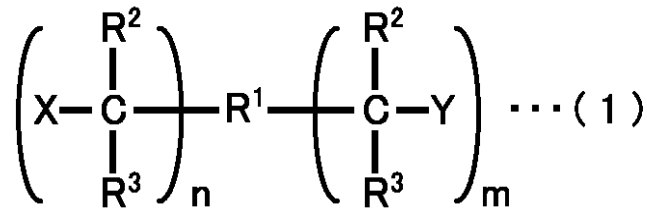


【特許請求の範囲】

【請求項 1】

リビングラジカル重合開始剤であって、以下の一般式(1)からなるリビングラジカル重合開始剤：

【化 1】



10

ここで、 R^1 は2以上の他の有機基と連結可能な有機基であって、炭素数1~12の脂肪族基、芳香族基、炭素数1~12のアルキルカルボニル基、炭素数1~12のアルコキシカルボニル基、アミノカルボニル基、炭素数1~12のアルキルアミノカルボニル基、炭素数1~12のジアルキルアミノカルボニル基、アリールカルボニル基、炭素数1~12のアルキルスルホニル基、アリールスルホニル基及びこれらの基を2つ以上組み合わせた有機基から選ばれ、

R^2 、 R^3 、 R^4 及び R^5 は水素原子、炭素数1~12の脂肪族基、芳香族基、アルキルカルボニル基、アルコキシカルボニル基、アミノカルボニル基、アルキルアミノカルボニル基、炭素数1~12のジアルキルアミノカルボニル基、アリールカルボニル基、カルボキシル基、炭素数1~12のアルキルスルホニル基及びアリールスルホニル基から選ばれる有機基であり、

20

X、Yはハロゲン原子であり、

m、nは1以上の整数であり、

前記X及びYはモノマーに対し、互いに反応性の異なる状態である。

【請求項 2】

前記ハロゲン原子はヨウ素、塩素又は臭素であることを特徴とする請求項1記載のリビングラジカル重合開始剤。

30

【請求項 3】

請求項1又は2に記載のリビングラジカル重合開始剤を用いる重合体の製造方法であって、

前記リビングラジカル重合開始剤の前記X又は前記Yの何れか一方のハロゲン原子のみについて、前記リビングラジカル重合反応開始剤と不飽和結合を有するモノマーとを混合し、前記モノマーの種類に応じた反応条件で行うリビングラジカル重合反応を、混合する前記モノマーの種類を順次変えつつ1回以上行い第1生成物を得る第1重合工程と、

前記第1生成物に含まれる前記X又は前記Yの双方のハロゲン原子について、少なくとも1種類以上の前記モノマーを前記モノマーの種類に応じた反応条件で順次リビングラジカル重合反応させ最終生成物を得る第2重合工程と、

40

を含むことを特徴とする重合体の製造方法。

【請求項 4】

前記第1重合工程及び前記第2重合工程は触媒を用いて行われ、前記第1重合工程及び前記第2重合工程は反応温度及び前記触媒の種類少なくとも一方を前記モノマーの種類に応じて異ならせて行われることを特徴とする請求項3記載の重合体の製造方法。

【請求項 5】

前記触媒は、原子移動ラジカル重合において用いられる遷移金属錯体系触媒、可逆移動触媒重合において用いられるリン、窒素、炭素、酸素、ゲルマニウム、スズ、及びアンチモンから選ばれる少なくとも1種の中心元素と、前記中心元素に結合したハロゲン原子と、を含む化合物からなる触媒、可逆的錯体形成媒介重合において用いられる有機アミン化

50

合物触媒、又はハロゲン化物イオンとのイオン結合を有する非金属化合物であって、前記非金属化合物中の非金属原子がカチオンの状態であり、ハロゲン化物イオンとイオン結合を形成している触媒であることを特徴とする請求項4記載の重合体の製造方法。

【請求項6】

前記第1重合工程及び前記第2重合工程は、180以下で行われることを特徴とする請求項3乃至5の何れか1項記載の重合体の製造方法。

【請求項7】

前記第1重合工程及び前記第2重合工程は、30分以上24時間以下の反応時間で行われることを特徴とする請求項3乃至6の何れか1項記載の重合体の製造方法。

【請求項8】

請求項3乃至7の何れか1項記載の方法を用いて製造されたことを特徴とする重合体。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、リビングラジカル重合に用いられる重合開始剤、重合体の製造方法及びそれらを用いて製造された重合体に関する。

【背景技術】

【0002】

従来から、ビニルモノマーを重合してビニルポリマーを得る方法として、ラジカル重合法が周知であった。ラジカル重合法は一般的に、得られるビニルポリマーの分子量を制御することが困難であるという欠点があった。

【0003】

また、得られるビニルポリマーが、様々な分子量を有する化合物の混合物になってしまい、分子量分布の狭いビニルポリマーを得ることが困難であるという欠点があった。

【0004】

具体的には、反応を制御しても、重量分子平均分子量(Mw)と数平均分子量(Mn)との比(Mw/Mn)として、2~3程度にまでしか減少させることができなかった。

【0005】

このような欠点を解消する方法として、1990年頃から、リビングラジカル重合法が開発されている。すなわち、リビングラジカル重合法によれば、分子量を制御することが可能であり、かつ分子量分布の狭いポリマーを得ることが可能である。

【0006】

具体的には、Mw/Mnが2以下のものを容易に得ることが可能であることから、ナノテクノロジーなどの最先端分野に用いられるポリマーを製造する方法として脚光を浴びている(例えば、特許文献1参照)。

【先行技術文献】

【特許文献】

【0007】

【特許文献1】特開2009-203359号公報

【発明の概要】

【発明が解決しようとする課題】

【0008】

ところで、上述した従来のリビングラジカル重合法は、重合開始剤の1つの開始基について重合反応が進行していく反応系であったが、複数の開始基についてそれぞれ異なる重合反応を行い得る反応系があればより好ましい。

【0009】

そこで、本発明は、上述した問題点に鑑みて案出されたものであり、2つの反応性の異なるハロゲン原子を有し、それぞれを開始基として2方向にそれぞれ異なる重合反応を行うことのできるリビングラジカル重合開始剤、重合体の製造方法及びそれらを用いて製造された重合体を提供することを目的とする。

10

20

30

40

50

【課題を解決するための手段】

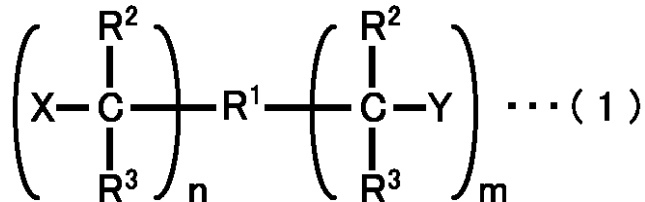
【0010】

本発明者は、上述した課題を解決するために、2つの反応性の異なるハロゲン原子を有し、それぞれを開始基として2方向にそれぞれ異なる重合反応を行うことのできるリビングラジカル重合開始剤、重合体の製造方法及びそれらを用いて製造された重合体を発明した。

【0011】

第1発明に係るリビングラジカル重合開始剤は、以下の一般式(1)からなるリビングラジカル重合開始剤：

【化1】



ここで、 R^1 は2以上の他の有機基と連結可能な有機基であって、炭素数1~12の脂肪族基、芳香族基、炭素数1~12のアルキルカルボニル基、炭素数1~12のアルコキシカルボニル基、アミノカルボニル基、炭素数1~12のアルキルアミノカルボニル基、炭素数1~12のジアルキルアミノカルボニル基、アリールカルボニル基、炭素数1~12のアルキルスルホニル基、アリールスルホニル基及びこれらの基を2つ以上組み合わせた有機基であり、 R^2 、 R^3 、 R^4 及び R^5 は水素原子、炭素数1~12の脂肪族基、芳香族基、炭素数1~12のアルキルカルボニル基、炭素数1~12のアルコキシカルボニル基、アミノカルボニル基、炭素数1~12のアルキルアミノカルボニル基、炭素数1~12のジアルキルアミノカルボニル基、アリールカルボニル基、カルボキシ基、炭素数1~12のアルキルスルホニル基及びアリールスルホニル基から選ばれる有機基であり、 X 、 Y はハロゲン原子であり、 m 、 n は1以上の整数であり、前記 X 及び Y はモノマーに対し、互いに反応性の異なる状態である。

【0012】

第2発明に係るリビングラジカル重合開始剤は、第1発明において、前記ハロゲン原子はヨウ素、塩素又は臭素であることを特徴とする。

【0013】

第3発明に係る重合体の製造方法は、第1又は第2発明に係るリビングラジカル重合開始剤を用いる重合体の製造方法であって、前記リビングラジカル重合開始剤の前記 X 又は前記 Y の何れか一方のハロゲン原子のみについて、前記リビングラジカル重合反応開始剤と不飽和結合を有するモノマーとを混合し、前記モノマーの種類に応じた反応条件で行うリビングラジカル重合反応を、混合する前記モノマーの種類を順次変えつつ1回以上行い第1生成物を得る第1重合工程と、前記第1生成物に含まれる前記 X 又は前記 Y の双方のハロゲン原子について、少なくとも1種類以上の前記モノマーを前記モノマーの種類に応じた反応条件で順次リビングラジカル重合反応させ最終生成物を得る第2重合工程と、を備えることを特徴とする。

【0014】

第4発明に係る重合体の製造方法は、第3発明において、前記第1重合工程及び前記第2重合工程は触媒を用いて行われ、前記第1重合工程及び前記第2重合工程は反応温度及び前記触媒の種類少なくとも一方を前記モノマーの種類に応じて異ならせて行われることを特徴とする。

【0015】

第5発明に係る重合体の製造方法は、第4発明において、前記触媒は原子移動ラジカル重合において用いられる遷移金属錯体系触媒、可逆移動触媒重合において用いられるリン

10

20

30

40

50

、窒素、炭素、酸素、ゲルマニウム、スズ、及びアンチモンから選ばれる少なくとも1種の中心元素と、前記中心元素に結合したハロゲン原子と、を含む化合物からなる触媒、可逆的錯体形成媒介重合において用いられる有機アミン化合物触媒、又はハロゲン化物イオンとのイオン結合を有する非金属化合物であって、前記非金属化合物中の非金属原子がカチオンの状態であり、ハロゲン化物イオンとイオン結合を形成している触媒であることを特徴とする。

【0016】

第6発明に係る重合体の製造方法は、第3乃至第5発明のうち何れか1つにおいて、前記第1重合工程及び前記第2重合工程は、180以下で行われることを特徴とする。

【0017】

第7発明に係る重合体の製造方法は、第3乃至第6発明のうち何れか1つにおいて、前記第1重合工程及び前記第2重合工程は、30分以上24時間以下の反応時間で行われることを特徴とする。

【0018】

第8発明に係る重合体は、第3乃至第7発明のうち何れか1つに係る重合体の製造方法を用いて製造されたことを特徴とする。

【発明の効果】

【0019】

上述した構成からなる本発明によれば、2つの反応性の異なるハロゲン原子を有し、それぞれを開始基として2方向にそれぞれ異なる重合反応を行うことのできるリビングラジカル重合開始剤、重合体の製造方法及びそれらを用いて製造された重合体を提供することが可能となる。

【図面の簡単な説明】

【0020】

【図1】本発明の実施形態に係る重合体の製造方法における素反応を示す模式図である。

【図2】実施例に係る重合体の製造方法における重合体の生成過程を示す模式図である。

【図3】実施例に係る重合体の製造方法により得られるリビングラジカル重合開始剤及び各ポリマーの $^1\text{H-NMR}$ チャートであり、(a)はリビングラジカル重合開始剤としてのヨウ化アルキル開始剤の構造式、(b)はリビングラジカル重合開始剤の $^1\text{H-NMR}$ チャート、(c)はポリマーPの $^1\text{H-NMR}$ チャート、(d)はポリマーQの $^1\text{H-NMR}$ チャート、(e)はポリマーRの $^1\text{H-NMR}$ チャートである。

【発明を実施するための形態】

【0021】

以下、本発明の実施形態に係るリビングラジカル重合開始剤及びそれを用いた重合体の製造方法について詳細に説明する。

【0022】

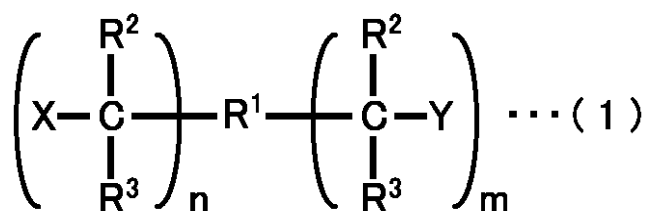
[リビングラジカル重合開始剤]

(1)リビングラジカル重合開始剤の化学式

本実施形態に係るリビングラジカル重合開始剤は、化学式(1)に示す構造を有するものであり、反応性が異なる2つのハロゲン原子を有している。

【0023】

【化1】



【0024】

上記化学式(1)中、 R^1 は二価以上の有機基すなわち2以上の他の有機基と連結可能な有機基であって、炭素数1~12の脂肪族基、芳香族基、炭素数1~12のアルキルカルボニル基、炭素数1~12のアルコキシカルボニル基、アミノカルボニル基、炭素数1~12のアルキルアミノカルボニル基、炭素数1~12のジアルキルアミノカルボニル基、アリールカルボニル基、炭素数1~12のアルキルスルホニル基、アリールスルホニル基及びこれらの基を2つ以上組み合わせた有機基が挙げられる。

【0025】

また、 R^2 、 R^3 、 R^4 及び R^5 はそれぞれ水素原子、炭素数1~12の脂肪族基、芳香族基、炭素数1~12のアルキルカルボニル基、炭素数1~12のアルコキシカルボニル基、アミノカルボニル基、炭素数1~12のアルキルアミノカルボニル基、炭素数1~12のジアルキルアミノカルボニル基、アリールカルボニル基、炭素数1~12のアルキルスルホニル基、アリールスルホニル基から選ばれる有機基であり、X及びYはハロゲン原子、nとmはそれぞれ1以上の整数を示している。化学式(1)の連結基 R^1 の左右の構造は非対称であり、そのためハロゲン原子XとYに異なる反応性が付与されている。

10

【0026】

(2) 連結基

連結基 R^1 は、2以上の他の有機基と連結可能な有機基であれば特に限定されない。具体的には、脂肪族基、芳香族基、炭素数1~12のアルキルカルボニル基、炭素数1~12のアルコキシカルボニル基、アミノカルボニル基、炭素数1~12のアルキルアミノカルボニル基、炭素数1~12のジアルキルアミノカルボニル基、アリールカルボニル基、炭素数1~12のアルキルスルホニル基、アリールスルホニル基及びこれらの基を2つ以上組み合わせた有機基が挙げられる。

20

【0027】

この連結基 R^1 は置換基を有していてもよく、この場合の置換基の数は、置換可能であれば特に制限は無く、1又は複数である。

【0028】

この連結基 R^1 について置換してもよい基としては、ハロゲン原子、置換されていてもよい直鎖又は分岐鎖状の炭素数1~12のアルキル基、置換されていてもよい芳香族基、置換されていてもよい非芳香族複素環式基、カルボキシル基、直鎖又は分岐鎖状の炭素数1~12のアルコキシ基、シアノ基又はニトロ基等が挙げられる。

30

【0029】

脂肪族基としては、置換されていてもよい直鎖又は分岐鎖状の炭素数1~12のアルキル基が挙げられる。

【0030】

脂肪族基が置換されている場合には、置換基の数は、置換可能であれば特に制限は無く、1又は複数である。

【0031】

また、脂肪族基について置換してもよい基としては、ハロゲン原子、置換されていてもよい直鎖又は分岐鎖状の炭素数1~12のアルキル基、置換されていてもよい芳香族基、置換されていてもよい非芳香族複素環式基、直鎖又は分岐鎖状の炭素数1~12のアルコキシ基、シアノ基又はニトロ基等が挙げられる。

40

【0032】

芳香族基は、芳香族炭化水素環基又は芳香族複素環基が挙げられ、具体的にはフェニル基、ピフェニル基、ターフェニル基、ナフチル基、ピナフチル基、アズレニル基、アントラセニル基、フェナントレニル基、フラレニル基、フリル基、チエニル基、ピロリル基、ピラゾリル基、イミダゾリル基、イソキサゾリル基、チアゾリル基、チアジアゾリル基、ピリジル基、ベンゾフラニル基、インドリル基、ベンゾチアゾリル基、カルバゾリル基等が挙げられる。

【0033】

この芳香族基は置換されていてもよく、この場合の置換基の数は、置換可能であれば特

50

に制限は無く、1又は複数である。

【0034】

また、芳香族基について置換してもよい基としては、ハロゲン原子、置換されていてもよい直鎖又は分岐鎖状の炭素数1～12のアルキル基、置換されていてもよい芳香族基、置換されていてもよい非芳香族複素環式基、カルボキシ基、直鎖又は分岐鎖状の炭素数1～12のアルコキシ基、シアノ基又はニトロ基等が挙げられる。

【0035】

(3) $R^2 \sim R^5$

脂肪族基としては、置換されていてもよい直鎖又は分岐鎖状の炭素数1～12のアルキル基が挙げられる。

【0036】

脂肪族基が置換されている場合には、置換基の数は、置換可能であれば特に制限はなく、1又は複数である。

【0037】

また、脂肪族基について置換してもよい基としては、ハロゲン原子、置換されていてもよい直鎖又は分岐鎖状の炭素数1～12のアルキル基、置換されていてもよい芳香族基、置換されていてもよい非芳香族複素環式基、直鎖又は分岐鎖状の炭素数1～12のアルコキシ基、シアノ基又はニトロ基等が挙げられる。

【0038】

芳香族基は、芳香族炭化水素環基又は芳香族複素環基が挙げられ、具体的にはフェニル基、ピフェニル基、ターフェニル基、ナフチル基、ピナフチル基、アズレニル基、アントラセニル基、フェナントレニル基、フラレニル基、フリル基、チエニル基、ピロリル基、ピラゾリル基、イミダゾリル基、イソキサゾリル基、チアゾリル基、チアジアゾリル基、ピリジル基、ベンゾフラニル基、インドリル基、ベンゾチアゾリル基、カルバゾリル基が挙げられる。

【0039】

この芳香族基は置換されていてもよく、この場合の置換基の数は、置換可能であれば特に制限は無く、1又は複数である。

【0040】

また、芳香族基について置換してもよい基としては、ハロゲン原子、置換されていてもよい直鎖又は分岐鎖状の炭素数1～12のアルキル基、置換されていてもよい芳香族基、置換されていてもよい非芳香族複素環式基、カルボキシ基、直鎖又は分岐鎖状の炭素数1～12のアルコキシ基、シアノ基又はニトロ基等が挙げられる。

【0041】

またアリアルカルボニル基としては、例えば、ベンゾイル基、1-ナフトイル基、2-ナフトイル基、2-ピリジルカルボニル基、3-ピリジルカルボニル基、4-ピリジルカルボニル基等が挙げられる。

【0042】

またアリアルスルホニル基としては、例えば、ベンゼンスルホニル基、トルエンスルホニル基等が挙げられる。

【0043】

また、化学式(1)中のX及びYはハロゲン原子を示すが、好ましくは塩素、臭素又はヨウ素であり、更に好ましくはヨウ素を示す。

【0044】

上述した本発明に係るリビングラジカル重合開始剤は、反応性が異なる2つのハロゲン原子を反応の開始基として有しているため、反応条件を適宜調整することで、それぞれの開始基について異なるリビングラジカル重合反応を進行させることができる。

【0045】

[重合体の製造方法]

次に、上述したリビングラジカル重合開始剤を用いてリビングラジカル重合を行うこと

10

20

30

40

50

により得られるラジカル重合性モノマーの重合体の製造方法について説明する。

【0046】

(1) 素反応

本実施形態に係る重合体の製造方法は、上述したリビングラジカル重合開始剤を用いて、図1に示す素反応を行うことにより実現される。図1は、本発明の実施形態に係る重合体の製造方法における素反応を示す模式図である。a、b、cはそれぞれ不飽和結合を有するラジカル反応性モノマーを表し、それぞれ違うモノマーであってもよく、又は同じモノマーであってもよい。また、A、B、Cはそれぞれポリマーブロックを表す。

【0047】

図1に示す素反応は、第1段階として、ハロゲン原子の1つを開始基として、ラジカル重合性モノマーの重合反応を混合するモノマーの種類を順次変えつつ1回以上行った後、第2段階として開始剤の骨格に残存した他のハロゲン原子を開始剤として、重合反応を行うことによりポリマーを製造するものである。

【0048】

ここで、図1のリビングラジカル重合開始剤中のハロゲン原子Yは、ハロゲン原子Xよりも反応性が高くなっている。

【0049】

また、反応条件1～4はそれぞれ異なる反応条件となっていて、反応温度、反応時間、触媒の有無や触媒の種類等のうち1つ以上のものがそれぞれ異なっている。

【0050】

図1の反応では、まず、モノマーaとリビングラジカル重合開始剤が、反応条件1で反応する。この反応条件1は、リビングラジカル重合開始剤のうち反応性の高いハロゲン原子Yにのみリビングラジカル重合が進行する条件となっている。

【0051】

こうしてリビングラジカル重合開始剤のハロゲン原子Yにモノマーaが複数重合したポリマーAが生成される。

【0052】

このポリマーAについて、次にモノマーbをリビングラジカル重合反応させるが、このときの反応条件を変えることにより、異なる重合体を得ることができる。

【0053】

具体的には、ポリマーAについて、反応性の高いハロゲン原子Yのみならず、反応性の低いハロゲン原子Xについても反応する反応条件2によりモノマーbを反応させることで、ポリマーAのハロゲン原子X側及びハロゲン原子Y側にそれぞれモノマーbが複数重合したポリマーBABが生成される。

【0054】

一方、ポリマーAについて、反応性の高いハロゲン原子Yのみが反応する反応条件3によりモノマーbを反応させることで、ポリマーAのハロゲン原子Y側にモノマーbが複数重合したポリマーABが生成される。

【0055】

このように、上述した素反応では、反応の第1段階において何れか一方のハロゲン原子が未反応のまま残存し、第2段階、第3段階で反応温度を変えるか、異なる触媒を加えることにより、残存したハロゲン原子が開始基としてモノマーと反応する。

【0056】

このようにして得られたポリマーBABやポリマーABについて、更にリビングラジカル重合反応を進行してもよい。

【0057】

例えば、ポリマーABについて、ハロゲン原子X及びハロゲン原子Yの両方が反応する条件4によりモノマーcを反応させることで、ポリマーABのハロゲン原子X側及びハロゲン原子Y側の両方にモノマーcが複数重合したポリマーCABCが生成される。もちろんポリマーABのハロゲン原子Y側とモノマーcが反応する条件下で反応を行い、ポリマ

10

20

30

40

50

— A B C を得ることもできるし、ポリマー C A B C 又はポリマー A B C について更に異なる重合反応を進行させることもできる。

【0058】

(2) ラジカル重合性モノマー

上述した反応で用いられるラジカル重合性モノマーは、有機ラジカルの存在下でラジカル重合を行い得る不飽和結合を有するモノマーである。このような不飽和結合は二重結合の他、三重結合であってもよい。すなわち、本実施形態に係る重合体の製造方法では、従来からリビングラジカル重合を行い得る公知のモノマーのうち任意のものを用いることができる。

【0059】

こうしたラジカル重合性モノマーは、具体的にはビニルモノマーと呼ばれるモノマーである。ビニルモノマーとは、一般式「 $\text{CH}_2 = \text{CR}^5\text{R}^6$ 」で示されるモノマーの総称である。

【0060】

この一般式において、 R^5 がメチルであり、 R^6 がカルボキシレートであるモノマーをメタクリレート系モノマーといい、本発明において好適に用いることができる。

【0061】

メタクリレート系モノマーの具体例としては、メチルメタクリレート、エチルメタクリレート、プロピルメタクリレート、*n*-ブチルメタクリレート、*t*-ブチルメタクリレート、ヘキシルメタクリレート、2-エチルヘキシルメタクリレート、ノニルメタクリレート、ベンジルメタクリレート、グリシジルメタクリレート、シクロヘキシルメタクリレート、ラウリルメタクリレート、*n*-オクチルメタクリレート、2-メトキシエチルメタクリレート、ブトキシエチルメタクリレート、メトキシテトラエチレングリコールメタクリレート、2-ヒドロキシエチルメタクリレート、2-ヒドロキシプロピルメタクリレート、3-クロロ2-ヒドロキシプロピルメタクリレート、テトラヒドロフルフリルメタクリレート、2-ヒドロキシ3-フェノキシプロピルメタクリレート、ジエチレングリコールメタクリレート、ポリエチレングリコールメタクリレート、2-(ジメチルアミノ)エチルメタクリレート等が挙げられる。

【0062】

また、メタクリル酸も用いることができる。

【0063】

また、2-(*N,N*-ジエチル-*N*-メチルアミノ)エチルメタクリレート+ノトリフルオロスルホニルイミニウム($\text{N}(\text{CF}_3\text{SO}_2)^{2-}$)塩、2-(*N*-エチル-*N*-メチル-*N*-水素化アミノ)エチルメタクリレート+ノトリフルオロスルホニルイミニウム($\text{N}(\text{CF}_3\text{SO}_2)^{2-}$)塩、1-エチル-3-メチルイミダゾリウムメタクリレート+ノフルオロハイドロジェネーション($(\text{FH})_n\text{F}^-$)塩、*N*-エチル-*N*-メチルピロリジニウムメタクリレート+ノフルオロハイドロジェネーション($(\text{FH})_n\text{F}^-$)塩等のイオン液体性のメタクリレートを用いることができる。

【0064】

上記ビニルモノマーの一般式において R^5 が水素であり、 R^6 がカルボキシレートで示されるモノマーは、一般にアクリレート系モノマーといい、本発明において好適に用いることができる。

【0065】

アクリレート系モノマーの具体例としては、メチルアクリレート、エチルアクリレート、プロピルアクリレート、*n*-ブチルアクリレート、*t*-ブチルアクリレート、ヘキシルアクリレート、2-エチルヘキシルアクリレート、ノニルアクリレート、ベンジルアクリレート、グリシジルアクリレート、シクロヘキシルアクリレート、ラウリルアクリレート、*n*-オクチルアクリレート、2-メトキシエチルアクリレート、ブトキシエチルアクリレート、メトキシテトラエチレングリコールアクリレート、2-ヒドロキシエチルアクリレート、2-ヒドロキシプロピルアクリレート、3-クロロ2-ヒドロキシプロピルアク

10

20

30

40

50

リレート、テトラヒドロフルフリルアクリレート、2-ヒドロキシ3-フェノキシプロピルアクリレート、ジエチレングリコールアクリレート、ポリエチレングリコールアクリレート、2-(ジメチルアミノ)エチルアクリレート等が挙げられる。

【0066】

また、アクリル酸も使用可能である。

【0067】

また、2-(N,N-ジエチル-N-メチルアミノ)エチルアクリレート+ノトリフルオロスルホニルイミニウム($N(CF_3SO_2)^{2-}$)塩、2-(N-エチル-N-メチル-N-水素化アミノ)エチルアクリレート+ノトリフルオロスルホニルイミニウム($N(CF_3SO_2)^{2-}$)塩、1-エチル-3-メチルイミダゾリウムアクリレート+ノフルオロハイドロジェネーション($(FH)nF^-$)塩、N-エチル-N-メチルピロリジニウムアクリレート+ノフルオロハイドロジェネーション($(FH)nF^-$)塩等のイオン液体性のアクリレートを用いることができる。

10

【0068】

アクリレートのリビングラジカル重合の制御は一般に困難であるが、本願発明によれば、その制御を行うことができる。特に、リン系の触媒を使用すれば、アクリレートの重合を好適に制御できる。

【0069】

上記ビニルモノマーの一般式において R^5 が水素であり、 R^6 がフェニルで示されるモノマーはスチレンであり、本発明に好適に使用可能である。

20

【0070】

また、 R^6 がフェニル又はフェニル誘導体で示されるモノマーはスチレン誘導体といい、本発明に好適に使用可能である。具体的には、o-、m-、p-メトキシスチレン、o-、m-、p-スチレンスルホン酸等が挙げられる。

【0071】

また、 R^6 が芳香族である、ビニルナフタレン等が挙げられる。

【0072】

上記ビニルモノマーの一般式において R^5 が水素であり、 R^6 がアルキルであるモノマーはアルキレンであり、本発明に好適に使用可能である。

【0073】

本発明には、2つ以上のビニル基を有するモノマーも使用可能である。具体的には、例えば、ジエン系化合物(例えば、ブタジエン、イソプレン等)、アリル基を2つ有する化合物(例えば、ジアリルフタレート等)、メタクリルを2つ有するジメタクリレート(例えば、エチレングリコールジメタクリレート)、アクリルを2つ有するジアクリレート(例えばエチレングリコールジアクリレート)等である。

30

【0074】

本発明には、上述した以外のビニルモノマーも使用可能である。具体的には、例えば、ビニルエステル類(例えば、酢酸ビニル、プロピオン酸ビニル、安息香酸ビニル、酢酸ビニル)、上記以外のスチレン誘導体(例えば、-メチルスチレン)、ビニルケトン類(例えば、ビニルメチルケトン、ビニルヘキシルケトン、メチルイソプロペニルケトン)、N-ビニル化合物(例えば、N-ビニルピロリドン、N-ビニルピロール、N-ビニルカルバゾール、N-ビニルインドール)、(メタ)アクリルアミド及びその誘導体(例えば、N-イソプロピルアクリルアミド、N-イソプロピルメタクリルアミド、N,N-ジメチルアクリルアミド、N,N-ジメチルメタクリルアミド、N-メチロールアクリルアミド、N-メチロールメタクリルアミド)、アクリロニトリル、メタアクリロニトリル、マレイン酸及びその誘導体(例えば、無水マレイン酸)、ハロゲン化ビニル類(例えば、塩化ビニル、塩化ビニリデン、テトラクロロエチレン、ヘキサクロロプロピレン、フッ化ビニル)、オレフィン類(例えば、エチレン、プロピレン、1-ヘキセン、シクロヘキセン)等である。

40

【0075】

50

これらのモノマーは単独で使用してもよいし、また2種以上を併用してもよい。また、2種以上のモノマーは、第1段階の反応開始時に同時に添加してもよく、又は反応の段階毎に添加してもよい。

【0076】

(3) 触媒

任意に選択されたモノマーに対し、必要に応じて任意に選択された本発明の触媒を用いることができる。触媒は無くてもよいが、触媒を加えることにより、反応はより良好に進行する。モノマーの種類と、本発明の触媒の種類との組み合わせは特に限定されない。

【0077】

この触媒としては、例えば原子移動ラジカル重合 (Atom transfer radical polymerization、ATRP法) において用いられる遷移金属錯体系触媒、可逆移動触媒重合 (Reversible Chain Transfer Catalyst Polymerization、RCTP法) に於いて用いられるリン、窒素、炭素、酸素、ゲルマニウム、スズ、及びアンチモンから選ばれる少なくとも1種の中心元素と、該中心元素に結合したハロゲン原子と、を含む化合物からなる触媒、可逆的錯体形成媒介重合 (RCMP) において用いられる有機アミン化合物、及びハロゲン化物イオンとのイオン結合を有する非金属化合物であって、該非金属化合物中の非金属原子がカチオンの状態であり、ハロゲン化物イオンとイオン結合を形成している触媒を挙げることができる。

【0078】

遷移金属錯体系触媒としては、周期律表第7族、8族、9族、10族、または11族などの低原子価金属と有機配位子とから形成される金属錯体、又は周期律表第7族、8族、9族、10族、または11族などの低原子価金属と高原子価金属、及び有機配位子の組み合わせからなる金属錯体 (特開2002-249505号公報参照) を用いることができる。

【0079】

この低原子価金属の例としては、塩化第一銅、臭化第一銅、ヨウ化第一銅、シアン化第一銅、酸化第一銅、塩化第一鉄、臭化第一鉄、ヨウ化第一鉄等を、高原子価金属の例としては二塩化鉄、二臭化鉄、二ヨウ化鉄、二塩化ルテニウム、二臭化ルテニウム、二ヨウ化ルテニウム等を挙げることができる。

【0080】

また有機配位子の例としては、ピリジン類、ピピリジン類、ポリアミン類、ホスフィン類等が挙げられ、具体的には2,2'-ピピリジル及びその誘導体、1,10-フェナントロリン及びその誘導体、テトラメチルエチレンジアミン、ペンタメチルジエチレントリアミン、トリス(ジメチルアミノエチル)アミン、トリフェニルホスフィン、トリブチルホスフィン等を挙げることができる。

【0081】

ゲルマニウム、スズ、またはアンチモンから選択される中心元素とする触媒としては、ゲルマニウム、スズ、またはアンチモンから選択される少なくとも1つの中心元素と、該中心元素に結合した少なくとも1つのハロゲン原子を含む化合物が挙げられ、具体的にはヨウ化ゲルマニウム(II)、ヨウ化ゲルマニウム(IV)、ヨウ化スズ(II)、ヨウ化スズ(IV)等を挙げることができる(特開2007-92014号公報参照)。

【0082】

窒素またはリンを中心元素とする触媒としては、窒素またはリンから選択される少なくとも1つの中心元素と、該中心元素に結合した少なくとも1つのハロゲン原子とを含む化合物が挙げられ、具体的には、ハロゲン化リン、ハロゲン化ホスフィン、ハロゲン化窒素、ハロゲン化亜リン酸、ハロゲン化アミンあるいはハロゲン化イミド誘導体等を挙げることができる(国際公開WO2008/139980号公報参照)。

【0083】

有機アミン化合物触媒としては、具体的にはトリエチルアミン、トリブチルアミン、1,1,2,2-テトラキス(ジメチルアミノ)エテン、1,4,8,11-テトラメチル

- 1, 4, 8, 11 - テトラアザシクロテトラデカン、エチレンジアミン、テトラメチルエチレンジアミン、テトラメチルジアミノメタン、トリス(2 - アミノエチル)アミン、トリス(2 - (メチルアミノ)エチル)アミン、及びヘマトポルフィリン等を挙げることができる(国際公開W O 2 0 1 1 / 0 1 6 1 6 6 号公報参照)。

【0084】

ハロゲン化物イオンとのイオン結合を有する非金属化合物であって、該非金属化合物中の非金属原子がカチオンの状態であり、ハロゲン化物イオンとイオン結合を形成している触媒としては、具体的にはアンモニウム塩、イミダゾリウム塩、ピリジニウム塩、ホスホニウム塩、スルホニウム塩、ヨードニウム塩等が挙げられ、より具体的には、テトラブチルアンモニウムヨードライド、テトラブチルアンモニウムトリヨードライド、テトラブチルアンモニウムプロモジヨードライド、1 - メチル - 3 - メチル - イミダゾリウムヨードライド、1 - エチル - 3 - メチルイミダゾリウムブロマイド、2 - クロロ - 1 - メチルピリジニウムヨードライド、ヘキサフェニルジホスファゼニウムクロリド、メチルトリブチルホスホニウムヨードライド、テトラフェニルホスホニウムヨードライド、トリブチルスルホニウムヨードライド、ジフェニルヨードニウムヨードライド等を挙げることができる(国際公開W O 2 0 1 3 / 0 2 7 4 1 9 号公報参照)。

10

【0085】

(4) 反応温度

反応温度は特に限定されず、0 ~ 180 が好ましく、30 ~ 120 がより好ましい。

20

【0086】

(5) 反応時間

反応時間は30分 ~ 24時間の範囲で各反応に好適なものを適宜選択することができる。

【0087】

(6) 反応溶媒

反応は無溶媒下で行うこともできるが、溶媒を用いてもよい。反応溶媒は、反応を阻害しないものであれば特に制限は無いが、アセトニトリル、塩化メチレン、テトラヒドロフラン、トルエン、キシレン、アセトン、メチルエチルケトン、エタノール、イソプロパノール、酢酸エチル、酢酸ブチル、エチルセロソルブ等を用いることが好ましい。

30

【実施例】

【0088】

次に実施例を挙げて本発明をさらに詳細に説明する。但し、本発明は実施例になんら制限されるものではない。

【0089】

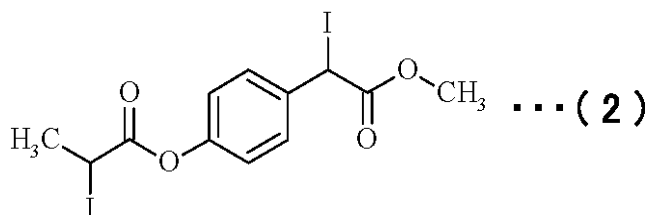
<リビングラジカル重合開始剤の製造>

(実施例1) 2 - ヨード - 2 - (4' - (2" - ヨードプロピオニルオキシ)フェニル)酢酸メチルの製造

【0090】

【化2】

40



【0091】

4 - ヒドロキシフェニル酢酸メチル 25.00 g (150.4 mmol)、ピリジン 47.60 g (601.7 mmol)、ジエチルエーテル 100 mL の混合液に、2 - ブロ

50

モプロピオニルブロミド 38.97 g (180.5 mmol) のジエチルエーテル 50 mL 溶液を 0 で添加した。

【0092】

その後、室温で 30 分撹拌した後、反応混合物を 5% 臭化水素酸、飽和炭酸ナトリウム水溶液、飽和亜硫酸ナトリウム水溶液、水で洗浄し、有機層を抽出した。抽出液を無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮し、2-(4'- (2"-プロモプロピオニルオキシ)フェニル)酢酸メチル 42.91 g (収率 95%) を得た。

【0093】

次に、2-(4'- (2"-プロモプロピオニルオキシ)フェニル)酢酸メチル 9.94 g (33.00 mmol) のジクロロエタン 66 mL 溶液に N-プロモスクシンイミド 7.05 g (39.60 mmol) を室温で添加し、LED ライト照射下で 5 時間還流撹拌した。

10

【0094】

得られた反応混合物を飽和亜硫酸ナトリウム水溶液、水で洗浄し、有機層を抽出した。抽出液を無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮し、2-プロモ-2-(4'- (2"-プロモプロピオニルオキシ)フェニル)酢酸メチル 11.67 g (収率 93%) を得た。

【0095】

2-プロモ-2-(4'- (2"-プロモプロピオニルオキシ)フェニル)酢酸メチル 10.37 g (27.23 mmol) のアセトニトリル 55 mL 溶液にヨウ化ナトリウム 16.35 g (109.11 mmol) を 0 で添加し、同温で 1.5 時間撹拌した。

20

【0096】

得られた反応混合物にジクロロメタンを加え、飽和亜硫酸ナトリウム水溶液、水で洗浄し、有機層を抽出した。

【0097】

抽出液を無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮し、シリカゲルカラムクロマトグラフィーで精製して 2-ヨード-2-(4'- (2"-ヨードプロピオニルオキシ)フェニル)酢酸メチル 5.80 g (収率 45%) を得た。¹H NMR (CDCl₃): = 2.04 (d, 3H), 3.76 (s, 3H), 4.68 (q, 1H), 5.52 (s, 1H), 7.07 (d, 2H), 7.63 (d, 2H).

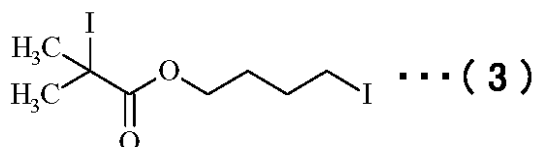
【0098】

(実施例 2) 2-ヨードイソ酪酸 4-ヨードブチルの製造

30

【0099】

【化 3】



【0100】

2-プロモイソ酪酸ブロミド 4.5 g (20 mmol) とヨウ化ナトリウム 9.0 g (60 mmol) を遮光下で混合し、テトラヒドロフラン 4.8 mL (60 mmol) を加えて 25 で 2 時間、次いで 50 で 30 分撹拌した。

40

【0101】

次に、得られた反応混合物にジクロロメタンを加え、飽和亜硫酸ナトリウム水溶液で洗浄した。無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮し、アセトニトリル 20 mL を加え、ここにヨウ化ナトリウム 6.0 g (40 mmol) を加えて 80 で 7 時間反応させた後に、ヨウ化ナトリウム 9.0 g (60 mmol) を加えてさらに 7 時間反応させた。

【0102】

その後、沈殿物を濾別し、減圧濃縮した後、ジクロロメタンを加えて飽和亜硫酸ナトリウム水溶液で洗浄した。無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮した。

【0103】

50

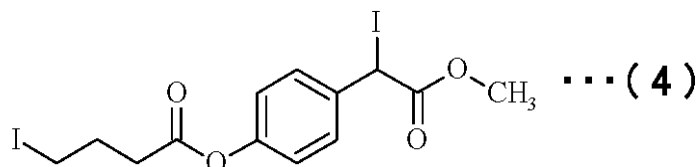
そして、得られた粗生成物をシリカゲルカラムクロマトグラフィーで精製し、(4-ヨードブチル)2-ヨードイソ酪酸を4.4g(収率68%)を得た。 $^1\text{H NMR}$ (CDCl_3):
= 4.17 (t, 2H), 3.22 (t, 2H), 2.06 (s, 6H), 1.98-1.90 (m, 2H), 1.83-1.77 (m, 2H).

【0104】

(実施例3) 2-ヨード-2-(4'-(4"-ヨードブタノイルオキシ)フェニル)酢酸メチルの製造

【0105】

【化4】



10

【0106】

4-ヒドロキシフェニル酢酸メチル20.00g(120.36mmol)、4-ブromo酪酸22.11g(132.39mmol)、ベンゼン60mLの混合液に、塩化ホスホリル16.69g(108.32mmol)を室温で添加した。

【0107】

その後、80℃で5.5時間攪拌した後、反応混合物を水100mLに添加し有機層を抽出した。抽出液を飽和亜硫酸ナトリウム水溶液、水で洗浄し、無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮し、2-(4'-(4"-ブromoブタノイルオキシ)フェニル)酢酸メチル34.37g(収率91%)を得た。

20

【0108】

2-(4'-(4"-ブromoブタノイルオキシ)フェニル)酢酸メチル26.31g(83.48mmol)のジクロロエタン85mL溶液にN-ブromoスクシンイミド22.29g(125.22mmol)を室温で添加した。

【0109】

次に、LEDライト照射下で6.5時間還流攪拌した。得られた反応混合物を飽和亜硫酸ナトリウム水溶液、水で洗浄し、有機層を抽出した。

30

【0110】

次に、抽出液を無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮した。得られた粗生成物をシリカゲルカラムクロマトグラフィーにより精製し、2-ブromo-2-(4'-(4"-ブromoブタノイルオキシ)フェニル)酢酸メチル7.29g(収率22%)を得た。

【0111】

次に、2-ブromo-2-(4'-(4"-ブromoブタノイルオキシ)フェニル)酢酸メチル6.92g(17.56mmol)のアセトン20mL溶液にヨウ化ナトリウム6.32g(42.14mmol)を室温で添加し、その後40℃で0.5時間攪拌した。

【0112】

次に、得られた反応混合物にジクロロメタンを加え、飽和亜硫酸ナトリウム水溶液、水で洗浄し、有機層を抽出した。

40

【0113】

そして、抽出液を無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮した。得られた粗生成物をシリカゲルカラムクロマトグラフィーにより精製し、2-ヨード-2-(4'-(4"-ヨードブタノイルオキシ)フェニル)酢酸メチル2.50g(収率30%)を得た。 $^1\text{H NMR}$ (CDCl_3):
= 2.17-2.21 (m, 2H), 2.66-2.69 (t, 2H), 3.25-3.28 (t, 2H), 3.73 (s, 3H), 5.53 (s, 1H), 7.02-7.04 (m, 2H), 7.59-7.61 (m, 2H).

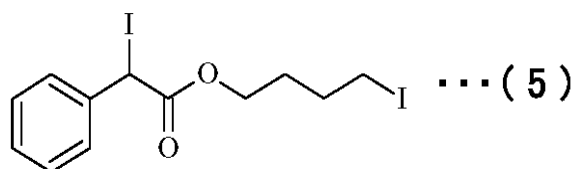
【0114】

(実施例4) 2-ヨードフェニル酢酸4-ヨードブチルの製造

【0115】

50

【化5】



【0116】

2-ブロモフェニル酢酸 6.5 g (30 mmol) に塩化チオニル 4.2 mL (60 mmol) を混合し、遮光下、80 で50分間撹拌した。

10

【0117】

続いて減圧下で揮発成分を除去してからTHF 8 mL (100 mmol) を加え、遮光下でヨウ化ナトリウム 18.0 g (120 mmol) を加えて27 で2時間撹拌後、ヨウ化ナトリウム 4.5 g (30 mmol) を加えて同条件で5時間撹拌した。

【0118】

次に、反応混合物にジクロロメタンを加え、亜硫酸ナトリウム水溶液 10 mL で洗浄し、さらに水相をジクロロメタン 20 mL で抽出し、有機層を混合した。無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮した。

【0119】

そして、得られた粗生成物をシリカゲルカラムクロマトグラフィーで精製し、2-ヨードフェニル酢酸 4-ヨードブチル 4.1 g (収率 31%) を得た。¹H NMR (CDCl₃): = 7.59-7.57 (m, 2H), 7.33-7.27 (m, 3H), 5.18 (s, 1H), 4.21-4.14 (m, 2H), 3.18 (t, 3H), 1.92-1.86 (m, 2H), 1.81-1.76 (m, 2H).

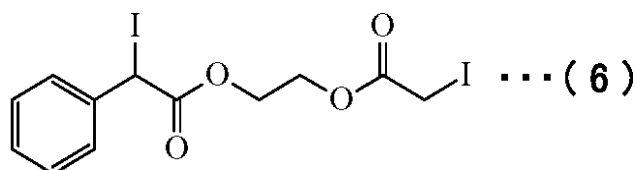
20

【0120】

(実施例5) 2-ヨード 2 フェニル酢酸 2-(ヨードアセトキシ)エチルの製造

【0121】

【化6】



30

【0122】

2-ブロモフェニル酢酸 25.00 g (114.66 mmol) に塩化チオニル 27.28 g (229.32 mmol) を加え、1時間還流撹拌した。

【0123】

その後、減圧化で残留塩化チオニルを除去し、エチレングリコール 284.67 g (4586.32 mmol) とピリジン 9.52 g (120.39 mmol) の混合物に室温で添加した。

40

【0124】

同温で1時間撹拌した後、ジエチルエーテルを加え、1N塩酸、飽和炭酸水素ナトリウム水溶液、水で洗浄した。

【0125】

無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮し、2-ブロモ-2-フェニル酢酸 2-ヒドロキシエチル 23.61 g (収率 80%) を得た。

【0126】

2-ブロモ-2-フェニル酢酸 2-ヒドロキシエチル 5.00 g (19.30 mmol)、ピリジン 1.60 g (20.26 mmol)、ジエチルエーテル 20 mL の混合物に

50

、 2 - プロモプロピオニルブロミド 4 . 0 9 g (2 0 . 2 6 m m o l) のジエチルエーテル 1 0 m L 溶液を室温で添加した。

【 0 1 2 7 】

同温で 1 時間攪拌した後、得られた反応混合物を 5 % 臭化水素酸、飽和炭酸ナトリウム水溶液、水で洗浄し、有機層を抽出した。

【 0 1 2 8 】

抽出液を無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮した。得られた粗生成物をシリカゲルカラムクロマトグラフィーにより精製し、2 - プロモ - 2 - フェニル酢酸 2 - (プロモアセトキシ)エチル 4 . 4 1 g (収率 6 0 %) を得た。

【 0 1 2 9 】

2 - プロモ - 2 - フェニル酢酸 2 - (プロモアセトキシ)エチル 4 . 2 5 g (1 1 . 1 8 m m o l) のアセトン 2 2 m L 溶液に 0 でヨウ化ナトリウム 4 . 0 2 g (2 6 . 8 3 m m o l) を添加し、同温で 3 0 分攪拌した。

【 0 1 3 0 】

その後、沈殿物を濾別し、減圧濃縮してジクロロメタンを加え飽和亜硫酸ナトリウム水溶液、水で洗浄し、有機層を抽出した。

【 0 1 3 1 】

そして、抽出液を無水硫酸ナトリウムで乾燥後、減圧濃縮した。得られた粗生成物をシリカゲルカラムクロマトグラフィーにより精製し、2 - ヨード - 2 - フェニル酢酸 2 - (ヨードアセトキシ)エチル 2 . 5 2 g (収率 4 8 %) を得た。¹H NMR (CDCl₃): = 3.6 6 (s, 2H), 4.34-4.38 (m, 4H), 5.55 (s, 1H), 7.28-7.33 (m, 3H), 7.58-7.60 (m, 2H).

【 0 1 3 2 】

< 重合体の製造 >

上述した素反応に基づき、以下の具体的な反応条件でリビングラジカル重合体の製造を行った。図 2 は、実施例に係る重合体の製造方法における重合体の生成過程を示す模式図である。図 3 は、実施例に係る重合体の製造方法により得られるリビングラジカル重合開始剤及び各ポリマーの 1 H - N M R チャートであり、(a) はリビングラジカル重合開始剤としてのヨウ化アルキル開始剤の構造式、(b) はリビングラジカル重合開始剤の 1 H - N M R チャート、(c) はポリマー P の 1 H - N M R チャート、(d) はポリマー Q の 1 H - N M R チャート、(e) はポリマー R の 1 H - N M R チャートである。

【 0 1 3 3 】

本実施例に係る重合体の製造方法では、全ての重合反応はアルゴンガス雰囲気下にて行った。

【 0 1 3 4 】

ブチルメタクリレート (B M A) 2 0 m L (8 M) に、2 - ヨード - 2 - (4 ' - (2 ' ' - ヨードプロピオニルオキシ)フェニル)酢酸メチル (1 6 0 m M) 及びトリブチルメチルホスホニウムヨージド (8 0 m M) を加え、6 0 で 8 時間加熱攪拌した。重合率 (モノマー転化率) は、5 5 % であった。

【 0 1 3 5 】

冷却したヘキサンに反応液を加え、ポリマーを再沈殿させて単離した。単離したポリマー P は、M n = 3 , 9 0 0、P D I = 1 . 1 5 であった。N M R 測定により、ヨウ化フェニルアセチル部位は、重合がほぼ 1 0 0 % 開始してポリマーが成長したのに対し、ヨウ化プロピオニル部位は 9 6 % が開始せず、ヨウ化フェニルアセチル部位からほぼ選択的に B M A のポリマーが成長した。

【 0 1 3 6 】

このポリマー P (1 6 0 m M) に、メチルメタクリレート (M M A) 2 0 m L (8 M) 及びトリブチルメチルホスホニウムアイオダイド (8 0 m M) を加え、6 0 で 8 時間加熱攪拌を行った。M M A の重合率 (モノマー転化率) は、3 0 % であった。

【 0 1 3 7 】

10

20

30

40

50

冷却したヘキサンに反応液を加え、ポリマーを再沈殿させて単離した。単離したポリマーQは $M_n = 5,800$ 、 $PDI = 1.24$ であった。NMR測定により、ヨウ化プロピオニル部位は90%が開始せず、ヨウ化フェニルアセチル部位からほぼ選択的にブロックポリマー(BMAとMMA)が生成した。

【0138】

更に、この2段階の反応で得られたポリマーQ(160mM)に、n-ブチルアクリレート(BA)20mL(8M)及びテトラブチルアンモニウムヨード(320mM)を加え、110で24時間加熱撹拌を行った。BAの重合率(モノマー転化率)は、32%であった。冷却したヘキサンに反応液を加え、ポリマーを再沈殿させて単離した。

【0139】

単離したポリマーRは $M_n = 8,000$ 、 $PDI = 1.33$ であった。NMR測定により、ヨウ化プロピオニル部位から、重合がほぼ100%開始してBAのホモポリマーが成長するとともに、ヨウ化フェニルアセチル部位からトリブロックポリマー(BMA、MMA、及びBA)が成長した。

【0140】

これにより、A鎖をBMA、B鎖をMMA、C鎖をBAとする、CABC型の非対称マルチブロックポリマーを合成することができた。

【0141】

各段階で得られたポリマーP、Q、Rの 1H -NMRチャートはそれぞれ図3の(c)~(e)に示すとおりである。

【0142】

なお、濃度の「M」は、モノマー1リットルを基準とするモル数を示す。例えば、8Mは、モノマー1リットルに8モルが含まれていることを意味する。なお、MMAの場合、モノマー1リットルが(バルクが)、室温で8モルである。

【0143】

また、濃度の「mM」は、モノマー1リットルを基準とするミリモル数を示す。例えば、80mMは、モノマー1リットルに80ミリモルが含まれていることを意味する。

【0144】

また、「 M_n 」は、得られたポリマーの数平均分子量である。

【0145】

また、「PDI」は M_w/M_n の比を示している。

【0146】

上述した本発明に係る重合体の製造方法によると、反応性が異なる2つのハロゲン原子を反応の開始基として有するリビングラジカル重合開始剤を用いているため、反応条件を適宜調整することで、それぞれの開始基について異なるリビングラジカル重合反応を進行させることができる。

【符号の説明】

【0147】

R^1 連結基

R^2 水素原子、芳香族基、脂肪族基及びアシロイル基のうち何れか1つ

X、Y ハロゲン原子

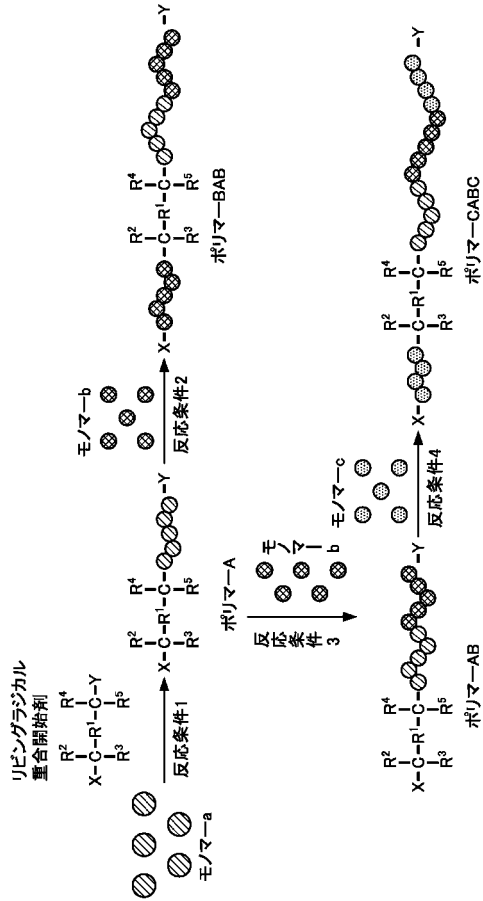
10

20

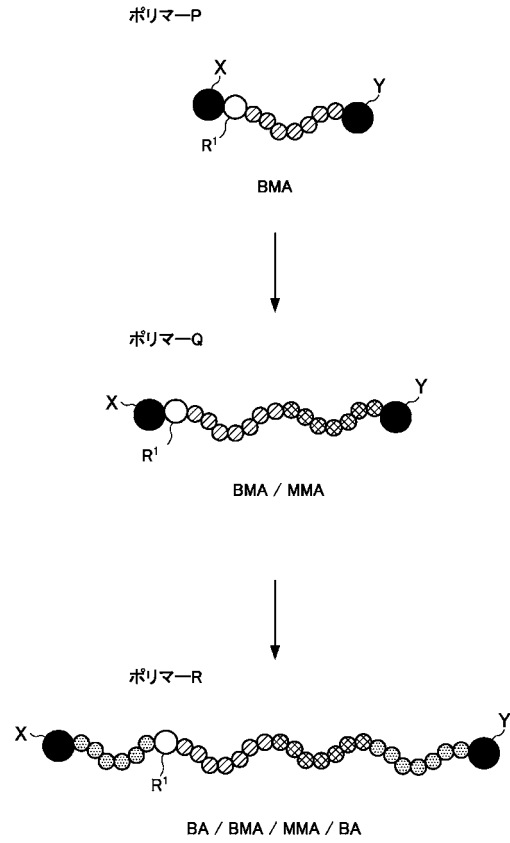
30

40

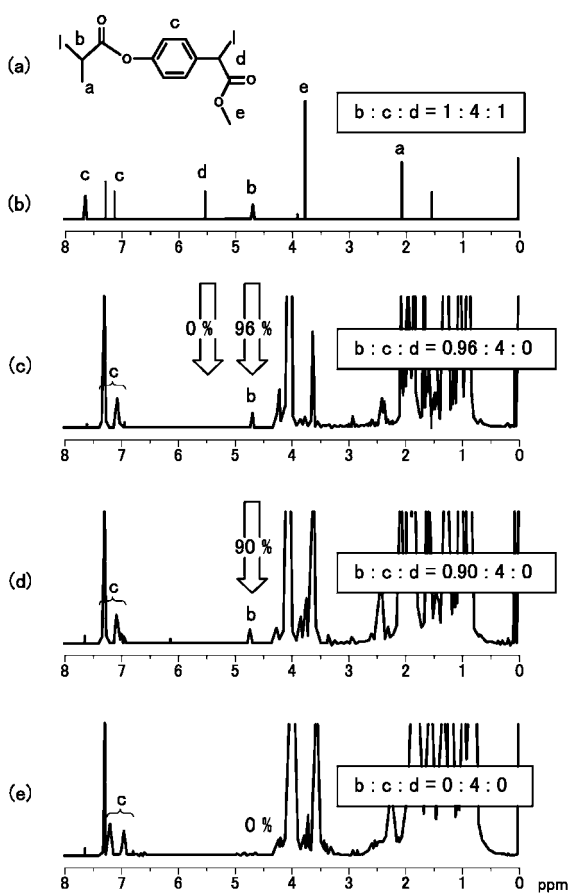
【 図 1 】



【 図 2 】



【 図 3 】



フロントページの続き

(72)発明者 小松 弘人
千葉県長生郡長生村七井土 1 3 6 5 合同資源産業株式会社内

(72)発明者 山口 優
千葉県長生郡長生村七井土 1 3 6 5 合同資源産業株式会社内

(72)発明者 實川 拓也
千葉県長生郡長生村七井土 1 3 6 5 合同資源産業株式会社内

Fターム(参考) 4H006 AA03 AB48 BJ50 BM10 BM74 KC12 KC14
4J015 EA06 EA08
4J026 HA05 HA06 HA09 HA10 HA11 HA13 HA29 HA32 HA39 HB05
HB06 HB09 HB10 HB11 HB13 HB29 HB32 HB39 HB45 HC11
HC29 HC32 HC39 HC44 HC45 HE06